

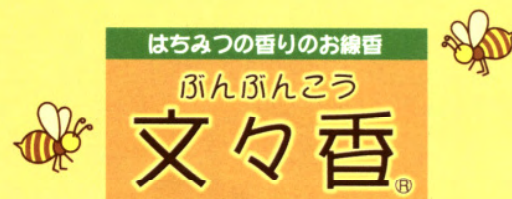


BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.46

'06 新春号



豊かな香りが、
やさしく心をほぐします。

753年、鑑真和尚が唐から持ち帰った練り香に、
蜂蜜が含まれていたと言われています。

『文々香』は、豊かな蜂蜜の香りを
たっぷり練りこんだお線香です。

さわやかな甘い香りが、お部屋に静かに満ちていきます。
ぜひ一度お試しください。



●標準小売価格 1,050円 (本体価格 1,000円)



創業三百有余年

梅栄堂

〒590-0943 堺市東之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代) FAX 072(227)1672
ホームページURL <http://www.baieido.co.jp>



▲いたる所に水仙が咲き、春を告げる越前海岸

越前海岸の水仙

四季彩々

寒風の日本海に向かってなだれ咲く

冬の北陸、越前海岸沿いの国道三〇五号線を走っていると、片側には波が碎ける厳しい冬の日本海、そしてもう一方には美しい花の絨毯を見ることができま

す。ここ越前海岸の越前町、越前

村、南越前町河野地区にまたがる区域には、一月から二月にかけて約四千万本の水仙が咲き乱れ、あたり一面に芳香を漂わせています。スイセンの原産地はヨーロッパ南部の地中海沿岸。ギリシャのサントロニーニ島には紀元前一五〇〇年のものと考えられる壁画があり、その中でスイセンの絵が描かれています。その後シルクロードを経由して、中国に渡り、水辺に咲き、仙境を感じられる花として「水仙」と名付けられました。日本には鎌倉時代に渡来し、「雪中花」とも呼ばれています。

「越前水仙」のルーツとしては、中国からこの地に流れ着いたと伝えられている「越前水仙発祥伝説」をはじめ諸々の説がありますが、いずれにせよ厳冬の地でこのように群生するまでになったのは越前岬に流れ込む暖流のおかげだと考えられます。現在、越前海岸の

いたる所に水仙畑が広がり、訪れる人の目を楽しませてくれていますが、同時に「越前水仙」として三百万本が切花として全国各地に出荷されています。国道三〇五号線沿いには「水仙の里公園」を始め「水仙ランド」や「水仙ミュージアム」もあります。一月上旬から二月上旬にかけての開花期には水仙祭りが開催され、水仙の無料配布も行なわれます。越前ガニで冬の味を堪能しながら、水仙で春を感じる…そんな贅沢な旅も、たまにはいいのではないのでしょうか。

因みに梅栄堂の「このへ」は水仙の香りのお線香です。ご自宅でも早春の香りをお楽しみ下さい。



越前岬水仙ランド TEL.0778-37-2501

JR福井駅より、京福バス右行1時間15分
北陸自動車道敦賀ICから海岸線を北へ
開花時期 1月から2月



賀正

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

梅栄堂社長 中田 信浩



小泉改造内閣が発足して早二ヶ月、

今年はどのように推移していきますのでしょうか。会社を預かるものとしては景気の回復がもう少しスピードアップしてくれることを望んでおります。

さて、年初から厳しいお話しで申し訳ございませんが、ご承知の通り昨年十月から梅栄堂の線香の一部について値上げをさせていただきました。

これはほかならぬお線香の原料となります。白檀と沈香の高騰によるものです。梅栄堂のお線香は白檀ほか香木をふんだんに使った高級線香です。我が社と

してもできる限りの価格の据置をしてみましたが、特に白檀は、ここ二年の間に三倍の価格に跳ね上がりしましたため、今回白檀を多く使っております好文本を中心に、平均十五%の値上げをさせていただきました。

より良い品質の線香づくりのためには避けられない事情のため、ご了承お願い申し上げます。

ここ数年、我が社では時代のニーズに合わせた新しい香りのお線香を発売させていただき、おかげさまでご好評をいただいております。本年春にも、新商品の発売を予定しておりますが、皆

様のご期待に添えるものとなりますことを願っております。

また、梅栄堂ならではの高級線香をご愛用いただいているお客様からは、「昨年話題になりました「十万円のお線香は、もうないのか」といったお問い合わせもいただいております。

こういった本物の香りを求めて梅栄堂を愛して下さるお客様のためにも、「品質、香りにこだわった上質の線香作り」に、これまで以上に精進させていただきます。本年も相変わります、どうぞよろしくお願い申し上げます。



香りの小部屋

丁子の花とつぼみ ▶



丁子（チヨウジノキ）の花とつぼみ。丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。

丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。

丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。丁子（チヨウジノキ）は、インドネシアのジャバ島のジャババタで栽培されています。



▲丁子の果実生

香りの考察

丁子〈丁香〉

大阪大学総合学術博物館 米田 該典



一口に香薬といいますが…

正倉院の宝物の中に香材や薬物があることはすでに幾度か紹介してきました。薬物とは言ってもそこに残されているのは、現代風に言えば単なる原料です。たしかに実際に使用するとすれば砕いたり粉にして丸剤にしたりそのまま飲むか、水で煎じ出す以上のことはなく、原料のままの形態で残されている。そう言ってしまうと、蘭奢待や全浅香でも、香材ではあっても原材料のままであって薬物と変わりはない。しかし、正倉院の宝物の代表格とも言える沈香木画箱のような細工物の表面には沈香が、白檀八角箱などに白檀が材料として利用されているのを見ると、薬にはそんな使い方はなく、香薬とはいうものの、香と薬は違うのだとひとしひと感じます。そんな香薬の一つに丁子があります。正倉院では丁香と記されていますが丁子、クロープのことで、古

代の文献では鶏古香（けいこかう）と言うのが丁子だと考えられています。

生育がむずかしいチヨウジノキ

現在、丁子やクロープと呼ばれるのはチヨウジノキの蕾のことです。未開花の時に花軸ごと採取して乾燥させたものです。しかし、輸入されてきた大きな袋を開いてみても、内容物は見事なまでに形状が揃っています。時には開花済みの物やすでに実になっているものもあっても良いと思うのですが、そんなのを探しても見つけたことがない。実際の収穫状況を未だ見たことがないので、勝手な推測は出来ないが、植物だけは幾度か実見してきたチヨウジノキはどこにでもある木ではなく、原産地はインドネシアの南地区のモルッカ諸島です。現在ではザンジバル産のクロープが多く市場に供給されていますが、ブラジルでも栽培され量は多くはないですが生産されています。しかし世

判ります。とすれば現在のようになったのはそれなりに理由があったはず。

防虫、防菌の効果はバツケン

そんな丁子の香りを珍重し、古来多くの人々が匂い袋やえび香、合香などに配合してきました。たとえばえび香は香材をそのまま粉碎して混ぜ合わせ、絹布や和紙の袋に入れて、紙や布、木材などの保存時にそばに置いてきた。その大きな目的は防虫ではなかったかと言われています。えび香は沈香や白檀など各種の香材が混合されているのですが、防虫の点から言えば主剤（材）は丁子であると断言してもいいでしょう。私たちが過去に行なってきた実験では丁子は強力な防虫、防菌効果を示した香材はないのですから、丁子にも困ったことがあります。丁子に含まれる油は強烈な芳香を持ち、濃い茶褐色です。時にその油が染み出し、傍にある物に褐色のシミを作ってしまう

世界の各地にある植物園でもチヨウジノキを保有しているところとなると決して多くはなく、実物を見る機会は案外少ないでしょう。理由は簡単です。栽培して生育させることが難しいからだけなんです。ですから二十世紀の半ば以降になってモルッカ諸島以外でも栽培に成功し生産が可能になったほどなのです。チヨウジノキは大きな木になり、開花時に見事に彩りが変わっているので遠目にも良く判ります。熱帯の花木にしばしば見られることで、熱帯の植物園で時に見かけると嬉しくな

って花の下へ走って行ってしまい、植物園訪問の目的を忘れてしまい、翌日改めて再度訪問したこともあるほどです。こんな特徴的な咲き方をするのだからこそ、採取時に時期のずれた物が混入すること

のですが、袋だけならともかく和服、彫刻品、書冊であれ何らかだわらない。そのために直接ふれあわないうように紙や布の袋などで包んだのでしょうか、包みが直接モノに触れているとじんわりと染み出してしまふ。でも、えび香から丁子を抜くことはできないでしょう。そこで、少し離すとかして直接ふれあわないうようにしてきました。各地に伝わる文化財の調査をしていると、しばしば大量の丁子に行き当たることがあります。永年経つと包みが破れ漏れだしたえび香の残りなんです。旧家や寺院の保存倉で、時にたくさん丁子が見つかると、こういう理由もあるんですね。その他いろいろなものに使われていて、丁子をふんだんに使った線香に出会ったこともあり、なかなか興味深い香材の一つです。

米田 該典 プロフィール

所属：大阪大学総合学術博物館 薬学博士
神戸市生
専攻：文化財の材質調査と保存の科学 薬用資源学 薬史学
薬学時代には正倉院薬物を調査し、博物館へ移籍後は文化財全般に枠を広げ、いつの間にか海外の文化財にまで手を広げつつある。



美を求めて交配が繰り返される「洋ラン」の女王

カトレア

香りの魅力で虫たちを呼び寄せます。

一九一八年、イギリスの園芸家カトレイ氏(W.C. Attley)のもとに、ブラジルから見慣れない苗

が届きました。その植物に興味を持った彼がそれを育てたところ、かつて見たことのないほど美しく華麗な花が咲き、人々を驚かせました。その後、分類学者がこの花を栽培者の名にちなんでカトレアと名付け、またラン科の中に新たにカトレア属を設けました。

これを機に、ヨーロッパでは貴族や富豪の間でラン栽培熱が一挙に高まり、熱帯地方に出かけては、多くのランが収集されました。



カトレアの原産地は主に中南米。ブラジルやコロンビア、ギアナなど熱帯地域に広く分布し、低地から標高四〇〇〇メートルの高地まで、岩や樹上に着生しています。茎は肥厚して球茎(バルブ)になっているのが一般的です。このバルブに水分や栄養分を蓄え、ここから花茎を伸ばして花を咲かせます。花の色は、白、紫、黄色など多種にわたり芳香を放ちながら、二、三週間も咲き続けます。

その後カトレアは品種改良が進み、同属間だけでなく、近縁属との交配も進み、多くの優秀花が生まれました。

カトレアをはじめとするラン科の植物は虫や鳥によって受粉する虫媒花です。熱帯の密林の中、大きな樹木の陰に隠れた見通しの悪い所では、魅力的な香りで遠くから虫たちを呼び寄せる必要があります。そのためラン科の花には濃厚で遠くまで届く香りを持つたものが多いと考えられます。

現在では品種改良が進んだこともあり、カトレアの香りも多種多様です。それぞれに芳香の特徴は微妙に違いますが、一般的には妖艶で永続性のある香りだといわれています。

話題

長寿企業の秘訣

日刊工業新聞(九月二十日)では、「栄枯盛衰」と題した特集ページで現存する長寿企業を紹介し、梅栄堂もその一つに選ばれました。「老舗トップが語る長寿の秘訣」についての記事で、中田社長が長寿企業としての過去、現在、未来についてのインタビューを受けました。内容としては、創業三十八年の歴史、天然香料を使った高級線香へのこだわり、また新たな香りの線香への挑戦など、長寿企業の自覚と、将来への展望などについてお話させていただきました。

最近のお線香傾向

読売新聞(九月二十四日)ではお彼岸にあたり、線香やローソクの最近の傾向をレポート。コーヒーの香りの線香として話題を

呼んだ「残香飛」や、「一期香」「文々香」など、線香にも香りの多様化がみられることが報告されました。また、なかなか箱では買えない「古香」などの高級線香の一本売りが、女性に人気があるとレポートされました。

スタジオに甘い香り

日本放送「お願い!DJ!小林克也はつびいウィークエンド」の中で、話題の商品として梅栄堂のお線香「文々香」「二期香」「残香飛」が紹介されました。

煙がひかえめで、値段もお手頃(一〇五〇円)なので、一度試してみても?とのコメントがありました。

香道体験

J・COM堺(ケーブルテレビ)の「イチオシ特ダネ旬報」は、堺の今を伝える番組です。今回レポートは、ゆかた姿で堺駅近

辺を散策し、お香を始め楽しい和風小物がいっぱいのお店「古香堂」を紹介。その後、梅栄堂

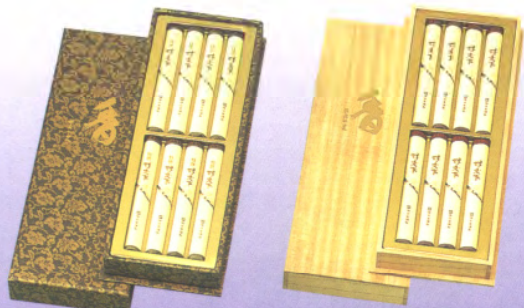
の「好文庵」を訪れ、七夕にちなんだ「星合香」という香道を初体験されました。

商品紹介

新しい年の
お届けものには、
新しいパッケージの
『好文木』を

『好文木』『特撰好文木』のご進物用パッケージがリニューアル。梅の花をあしらった、優しくて上品なデザインになりました。

『好文木』『特撰好文木』は白檀をはじめとする、天然香料をふんだんに使った、梅栄堂を代表する名香でございます。ぜひ、お届けものとしてご利用ください。



特撰好文木 短寸小把八把入化粧箱
5,250円(本体価格 5,000円)

好文木 短寸小把八把入桐箱
3,150円(本体価格 3,000円)